

誰もが知りたい

ローザンヌ宣教シリーズ

No. 13、4

イスラムとは何か
～イスラム教徒への伝道～



*Let the Earth
hear
His Voice*

**Lausanne
Occasional
Papers**

No.13

Thailand Report-

Christian Witness to Muslims

No. 4

The Glen Eyrie Report- Muslim Evangelization

Lausanne Committee for World Evangelization

関西ミッション・リサーチ・センター/日本福音同盟

誰もが知りたい
ローザンヌ宣教シリーズ

№. 13, 4

イスラムとは何か
～イスラム教徒への伝道～

(1 9 8 6 年)

イスラム教——それは何か イスラム教徒伝道への呼びかけ

「このように、私は、他人の土台の上に建てないように、キリストの御名がまだ語られていない所に福音を宣べ伝えることを切に求めたのです。」ローマ人への手紙 15 : 20

最近入手した情報によると、世界中に散在しているイスラム教徒の数は8億から10億近いと言われており、その数はますます増加の一途をたどっていると見られている。ついこの間まで7億と称されていたことを思うと、その急成長ぶりには驚くべきものがある。全世界のクリスチャンの総数に徐々に接近しつつあると言うよりも、むしろ追い越しかけていると言っても過言でないほど、イスラム教徒の進出にはまさに目を見張るものがある。世界中の大都市でイスラム教寺院（モスク）の見当らない都市は無いと云われるほどである。

ところが、このようにイスラム教の勢力の増し加わっている世界情勢の中で、宣教師達の大部分、つまりその中の86.6%の人々は、すでにクリスチャンになっているか、あるいはクリスチャンによって到達出来る範囲にいる人々に対して働くように派遣されている。残りの13.4%がイスラム教世界を含む未伝グループに遣わされていると云う。特に、イスラム教徒に対しては、イスラム教徒百万人に対してわずか1人の宣教師の割合でしかない。イスラム教世界全体において働いている宣教師の数の総数は何とアラスカ州やエルサレムに在住している宣教師の数よりも少ないというデータが出ている。

イスラム圏全体の未伝グループの数は4,000を越えており、この数値は増えることはあっても、人口急増に伴って減ることは決してないと考えられる。

ところで、我々日本人キリスト者にとって今日迄イスラム教の存在は全く縁遠いものであり、身近なものとしてとらえるにはあまりにも多くを知らな過ぎたと

いう感じがするのであるが、最近、中東の政治情勢や石油産出国の動向、アジアの中のイスラム教社会との接触などを通して、否応なしにイスラム教やイスラム文化に触れる機会が多くなりつつある。マスコミ（新聞・ラジオ・テレビなど）を通してもたらされる情報だけでも相当な量になるのであろうし、海外に出て行く機会のますます多くなる日本人（その中にクリスチャンも相当数含まれてくるであろう）にとって、イスラム教徒もまた隣人の中に数えられ、交流を通して、いわゆる生のまゝの知識を得ることが出来るようになってきていることは、お互いに同慶のいたりである。

しかし、我々キリスト者にとっては、単にイスラム教世界についての一般常識的な知識や情報を持つことだけで事足りてしまっているわけにはいかない事情がある。福音宣教という視点からイスラム教徒の存在を考える時、彼等もまたイエスキリストを単なる一預言者としてではなく、神の御子、全人類の罪よりの救主、来たるべき王の王、主の主として受け入れる必要がある。そして、そのことはまさに急を要するのである。

このたび、ローザンヌ宣教シリーズの翻訳出版の働きの一応のしめくゝりとして、イスラム教徒への伝道に関する2冊をとりあげて紹介出来るようになったことを心から喜ぶものである。この種の文献は、筆者の知る限りでは殆んど皆無であったし、これからもおいそれと手に入れることは困難であらうと思われる。

いささかおそきに過ぎた感があることは否めないが、今後、世界の福音派に伍して世界宣教の働きにたずさわる日本の教会やキリスト者にとって、これだけは知っておいてもらいたいと思われるデータをこのような形でおとどけ出来たことは翻訳にたずさわった者として、これ以上の喜びはないと云えるほど嬉しい。

是非共この小冊子をひろく頒布していただき、イスラム教世界における福音宣教の進展のために有効に活用していただきたいものである。冒頭の使徒パウロの告白が我々一人一人の告白になれるよう切に祈って、筆を置かせていただく。

関西ミッション・リサーチ・センター理事 古 山 洋 右

目 次

序 論	1
1. 反省への呼びかけ	1
イ 教会は成長すべきもの	3
ロ 人々の集団（グループ）	4
ハ 反抗と受容性	8
ニ 異文化を尊重すること	12
ホ 計画をたてることの必要性	15
2. 行動への呼びかけ	19
イ 地域教会における訓練への呼びかけ	19
ロ 我々の信仰の再検討への呼びかけ	21
ハ 保護や奉仕活動への呼びかけ	27
ニ イスラム教徒歓迎への呼びかけ	30
ホ 文書や口頭による伝達への呼びかけ	34
ヘ 対話への呼びかけ	37
ト 正義のための行動への呼びかけ	40

序 論

26ヶ国から、タイのパタヤで開かれたこの協議会の分科会に集った70人の参加者の多くは、イスラム世界の国々から来た。すでに開催されてきた、1974年のローザンヌ、1978年のコロラド・スプリングスなどの会議からも我々は、多大の刺激を受けてきており、また、今回のこの小協議会のためにも、各地方や各国毎に持たれてきた学習グループにおいて、準備を積み重ねてきているのである。

この協議会によって我々の前におかれていた責務が何であるかを真剣に受けとめ、熟考すると共に、交わりと討論を通して、明白なしかも特定の行動に移っていくよう呼びかけることが出来たことを我々は高く評価するものである。

1 反省への呼びかけ

ローザンヌ世界宣教委員会（LCWE）によって出版されている資料の多くは、グループへのアプローチに基いているために、我々はそのようなアプローチをとるにいたった経緯を分析した結果、次のようなことを特定することが出来たのである。

つまり、人類学、社会学、異文化間のコミュニケーションの最近の研究が、個人や共同体の行動形式やコミュニケーションの仕方について新しい洞察をもたらすようになったこと。

また、第三世界において、夫々異った状況のもとで教会が誕生する仕方や、これらの教会が成長している原因を観察すること。（教会成長運動）

そして、過去における多くの宣教の働きの結果がかんばしくないことや、教会の歴史からさらに学びとろうとする試みがあることなどである。

イスラム教徒に対する伝道にこのアプローチの方法を適用するに当たって、我々は、五つの明白に強調されなければならない、確信すべきことがあることを知るに至った。ここにそれらを列挙すると次のようになる。

(イ) 教会は成長しなければならない。

(ロ) 個人にではなく、多くの未伝グループに到達していかなければならない。

同一均質群の原理 — ローザンヌ宣教シリーズNo.1 パサデナ協議会
— 同一均質群の原理を参照のこと。

(ハ) あるグループの人々がより反抗時であり、他のグループがより受容時である場合には後者に集中する。

(ニ) 他の文化に対しては、それをより尊重する必要がある。

(ホ) 注意深く計画を立てる必要がある。

これらの強調点は、必ずしも真新しいものでないことを知るのとは大切である。例えば、西欧における過去100年間におよぶよく知られたイスラム研究家の業績によって、イスラムに対する非常な尊敬が、宗教としてだけでなく、文化としても払われるようになってきている。

またそれらは、決して（学派や一つの運動にのみ帰属するものではない。もし新しくなったとすれば、それは、これらの強調点が近來になってから、まとめられ、組み合わせられるようになってきたこと位であろう。

この運動に対する批判は、それが独善的であるとさえ思われるような宣教学の一体系として、完全にすべてをその中に包みこんでしまっているものであるというところに強く向けられている。しかし、この運動にかかわっている者達は、真先に彼らがそのようなやり方でこれらの新しいアプローチを試みようとしているのではないことを保証している。

それ故に、我々は、五つのポイントに分けて、イスラム教徒への伝道についての強調点を、その長所と共に、弱点や限界にも注意を払いながら考察していきたいと思う。